

# 日本一つながる学食プロジェクト

## 地域交流

代表者：教育学部養護教諭養成課程 2年 梅津 尊子

### 連携先

- ・株式会社坂東太郎
- ・茨城県天心記念五浦美術館

### 顧問教員

清水 恵美子（社会連携センター・准教授）

### 参加者

川原涼太郎（工学部機械工学科 3年）  
新井ひな乃（人文学部人文コミュニケーション学科 2年）  
石津 彰理（人文学部社会科学科 2年）  
鐘下 航平（人文学部社会科学科 2年）  
佐久間 瑠（人文学部社会科学科 2年）  
千葉 綾馬（人文学部社会科学科 2年）  
梅津 尊子（教育学部養護教諭養成課程 2年）  
伊藤 真帆（教育学部情報文化課程 2年）  
大村みるほ（教育学部情報文化課程 2年）  
野原緋奈子（教育学部情報文化課程 2年）  
花崎 諒（工学部情報工学科 1年）  
中島 千尋（教育学部養護教諭養成課程 1年）

### プロジェクトの概要

当プロジェクトは、茨苑レストランが「日本一つながる学食」になることを目指して株式会社坂東太郎（以下坂東太郎）と連携し、週2回の会議を通じ意見を交換しながら目標の具現化を一步步進めている。平成27年10月に、茨苑会館内にある学生食堂をリ

ニューアルすることを目的とし発足。平成28年9月、学生の意見が取り入れられた「茨苑レストラン」としてリニューアルオープンを果たした。その後は新メニュー開発やイベントの開催、企業連携などを中心に学生や地域と密に関わっている。当プロジェクトは、食を通じて地域や人とのつながりを学び、成長できる、「食と学びの日本一」をメインテーマとし、それに付随して「感じる、飛び出す、好きになる」をサブテーマとしている。これは茨苑食堂で提供される食材や物、企画を通じて、それに興味をもった人が実際に生産の場に行ったり地域の方と関わったりしていくことで、茨城という土地を理解し愛着を持ってもらおうというものである。私たちは、学生と地域・企業がお互いに且つ自主的に関わり合うようになれば茨城大学の地域との連携力が学生自身の手によって向上し、学生自身の社会力も向上すると考える。当プロジェクトは、茨苑食堂を様々な人が気軽に立ち寄れる場所にすることで、人と情報が集まりそれぞれが繋がる場に、食堂を利用する人が受け身ではなく自主的に地域に参画できるようになることを目標としている。

### プロジェクトの成果報告

#### ●メニュー開発

今年度は4度の期間限定メニューの開発をおこなった。開発の方法としては、定期的に回収しているアンケートの結果を基に進める形や、日本一つながる学食プロジェクト（以

下つな食) メンバーからの意見を基に進める形等があげられる。以下販売した順に示していく。

今年度初めのメニュー開発では新歓も兼ね、つな食メンバー以外も参加する試食会を2度開催した。その中で、茨苑食堂で最も人気のある『からあげ定食』の量が女性には多いため、「女性も食べやすい唐揚げメニューが欲しい」という意見を基に「からたま黒酢丼(唐揚げに玉ねぎを黒酢で和えたソースをかけた丼)」を開発した。この商品は6月1日から7月5日まで販売し、477食売り上げた。利用者からは「また販売してほしい」という声が多く聞かれ、今後も人気メニューを気軽に楽しめるような開発が必要であると感じている。次に、茨城県が生産量一位である「メロン」を使用したクレープを夏メニューとして開発した。7月10日から8月10日までの期間で153食売り上げたが、長期休業前ということもあり利用者が少なく、販売期間を短くした方がよいという意見があった。後期に入ってから、冬メニューとして「つな食サンのあったかプレート」を開発した。このメニューは、夏休みに行った他大学の学食見学で食したメニューを参考にした。内容は「クリームシチュー、チキンソテー、ご飯orパン、りゅうなんしえ」。つな食としては初のセットメニューであり、和食が多い食堂内で洋食は珍しく、チャレンジした部分が多いメニューだった。そのため、試作が難航したが、坂東太郎の方々のご尽力により販売に至った。結果的には、パンを主食として選択できたことが作用し、12月1日から12月22日までで160食を売り上げた。そして、2月1日から2月14日までのバレンタインメニューとして、昨年販売した「恋くれープ」を基盤に「大人の恋くれープ」を開発した。昨年同様、茨城県産の苺「いばらキッス」を使用。坂東太郎の方々アドバイスのにより、

生地をココア生地にしたりトッピングにミントを使用したりすることで、昨年度よりもパワーアップした商品を目指した。販売期間はテスト期間中にも関わらず、連日売り切れになるほどの人気を博した。一方で、今年度は恋くれープを大きく成長させることができたが、同時に来年度以降の恋くれープの成長も難しくなったのではないかとの意見もある。



メロメロクレープ



つな食サンのあったかプレート

## ●企画

当プロジェクトの目標である、学生と地域がつながるといふ部分に対し、「つながる企画」として進めている。今年度は、茨城県天心記念五浦美術館(以下美術館)の開館20周年記念「龍を描く」展の商品を開発するお話をいただき、学生の意見を取り入れていただきつつ坂東太郎とコラボレーションした。

「龍を描く」にかけ、商品名を「りゅうなんしえ」とし、岡倉天心の「茶の本」から着想を得て茨城県産のお茶の葉を使用した商品を5個入り1箱で開発。パッケージや、箱に入れるカード、さらにポスターのデザインと文面の作成を学生が担当し、坂東太郎・美術館・茨城大学の皆様からのご意見を基に完成させた。「龍を描く」の開催期間である10月25日から11月26日まで美術館にて販売した。会期中にはメンバーが美術館を訪問し宣伝させていただいた。また、会期後は茨苑レ

レストランにて販売し、「つな食サンタのあったかプレート」のデザートとしても使用した。12月22日で販売終了とし、計1516個（うち箱売り282箱）売り上げた。りゅうなんしえは各方面で紹介していただき、つな食を多くの方々に知っていただく機会となった。また、美術館との繋がりを生み出すことができたとともに、様々な団体の思いを一つの形にすることについて学ぶことができた。

12月1日にはつな食初のイベントとして、クリスマス企画を開催した。学内の音楽サークルやパフォーマンスサークルに協力を要請し、3団体から協力を得ることができた。茨苑レストランのスタッフの皆様にもオードブルを用意していただくなど、お力添えいただいた。来場者からは会費を徴収する形をとったが、集客が非常に難しかった。各参加団体の発表は素晴らしく、良い会となったが、課題も多く残ることとなった。しかし、学内サークルとの繋がりを作ることができたことや、来場者のほとんどが「また来たい」と答えていることから、今後への希望が伺える。今回の反省を今後のイベント開催に繋げていきたい。

今年度は、大学内外どちらともつながりを生み出す企画を行うことができた。今後はそのつながりを途絶えさせることなく、それぞれが繋がる場として茨苑レストランが機能していくことができるよう活動していく。また、他プロジェクトとのコラボレーションの話も出ているため、来年度以降進めていきたい。さらに、夏休みには青山学院大学17号館の学食「イチナナ」と東京学芸大学図書館のカフェ「note cafe」を見学させていただいた。どちらも茨苑レストランにはない要素があった。イチナナのセットメニューに着想を得て冬メニューのセットを開発したり、note cafeの学生が自由に記入できるノートから、茨苑祭では来場者に自由に記入してもらえ

コーナーを作ったりした。他大学の学食を見学させていただくことは非常に参考になることが多く、今後も様々なところを訪問させていただき、茨城大学に合った形で取り入れていきたいと思う。



パリゅうなんしえ ←



クリスマス企画 ←

### ●広報

今年度は以前よりも広報に力を入れることができた。各メニュー、企画ごとにポスター掲示やピラ配布をし、FacebookやTwitterといったSNSを利用した広報も活発に行った。さらに、茨苑レストラン前に黒板を設置し、メニュー・企画の宣伝とともに、つな食の日頃の活動についての紹介も行っている。これらはメニューや企画だけではなく、プロジェクトや食堂自体の周知にもつながったと考えている。2月からは大学周辺の店舗にもポスターを掲示していただけるよう要請している。好意的に受け入れて下さる店舗が多く、学外の方への広報にさらに力を入れていくための自信へつながっている。また、学内行事にも積極的に参加した。新歓祭での活動紹介、オープンキャンパスでのかき氷の販売、茨苑祭での展示と活動紹介を通して、学内の方は勿論、学生の保護者や高校生への広報に努め

た。今年度は三村学長にも活動を紹介させていただき機会を設けていただき、今後の活動に向けた自信に大いにつながった。さらに、つな食には「つなこる」というキャラクターが存在し、広報に活用している。多くの方々から好評をいただいているため、今後もより積極的な活用方法を探っていく。

観るなび↓



活動紹介ボード



茨苑祭での発表

このようにメディアに取り上げていただけるのは、地域の方にも足を運んでいただくきっかけとなる。地域との繋がりをさらに生み出し、学生たちと繋げることができるよう活動していきたい。

●各メディア

以下紹介していただいたメディア。

- ・茨城新聞 地域欄
- ・公益社団法人日本観光振興協会 全国地域観光情報センター全国観るなび
- ・公益財団法人日本ナショナルトラスト メールマガジン第一号



茨城新聞 地域欄  
(平成29年11月22日)  
←